



入
学
試
験
問
題

国
語

函館ラ・サール高等学校
2022年2月15日

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人間にとつて、リズムというもののほど広く感じとられる現象は少ないのではないだろうか。文明が違つても、年齢や性別や個性が違つても、「リズム」と聞いて、それなりのイメージを抱けない人はないはずである。リズムという言葉を知らない人でさえ、歩くときにはリズムカルに歩いているし、^①そのことを指摘されればただちに意味を理解するにちがいない。舞踊や音楽に詳しくない人でも、それを見たり聞いたりすると何かがからだの内部で弾むのを感じ、それがリズムだと教えられればただちに快く納得するだろう。

そして人がリズムと聞いて思い浮かべる現象は、見渡せば世界のすみずみにまで満ち満ちている。水面に石を落とせば輪のような波がリズムカルに広がるし、時計の振り子も弾力的に反復する音を立てる。身体そのものも不随意的にリズムを刻んでおり、心拍や呼吸などの場合はそのリズムを随意的に大きくすることもできる。天空を仰げば月は盈ち虧けを繰り返して、注意深く観察すれば、星の運動もミヤクドウする秩序を感じさせる。

^bこのリズムの感受性は人類の地域も歴史も超えて、いわゆる文明化の程度と関係なく共有されている。むしろ文字も持たない先史的な文明のほうが、リズムの感受性を高度に発達させているといえるかもしれない。太鼓の多様な拍節で信号を送り、縄の結び目の長短によつて意味を伝えた先史人は、近代人より繊細なリズムの感覚を持っていたと想像される。宗教儀式や社交の娯楽を見ても、近代人よりも前近代的な部族のほうが、舞踊のリズムをより重要視しているようにみえる。

同じことは個人の成長段階についてもあてはまるようであつて、リズムは成人にも、言葉や文字を知らない幼児にも共通して理解される。泣いている乳児を一定のリズムで揺ると笑いをとり戻すし、別のリズムで揺ると静かに寝入ることが知られている。成人も行進曲のリズムに活力を鼓舞され、電車の断続的な振動によつて居眠りを誘われる。リズムの持つこの正反対の効果については後にサイコウするが、とにかく^②リズムは人の生涯を貫く共通語であるのは疑いない。

リズムが共通語であるといえば、これは異なつた共同体や文化のあいだでも互いを繋ぐ強い力を備えている。初めて接する異文化のリズムであつても、それがリズムだということはだれにもただちに感じとることができる。文化は人の身についた慣習だから、それを異文化人が再現するのは容易ではないが、本気で努力さえすれば不可能ではない。ヒップ・ポップというのはアフリカユライのリズムだが、アメリカの黒人をなかだちにして、今では世界中に愛好者が広がっている。

リズムはまた人間の感覚器官の違いをも超えていて、俗に五感と呼ばれるすべての感覚を通じて享受することができる。耳は音のリズムを聞き、目は点や線、さらに色彩の対比のあいだにリズムを感じとる。皮膚も触觉のリズムな刺激を感じわけるし、心臓の鼓動のように、いわば内臓の触觉が直接に受容するリズムもある。何よりも全身の筋肉と骨格はリズムに敏感であつて、多くの日

常活動をリズムミカルにおこなうことができるうえ、純粋にリズムを満喫するためだけの運動、ほかならぬ舞踊に「ポットウ」することもできる。

このことを裏返していえば、リズムを受けとる特定の感覚器官、感性の種類はどこにも存在しないということになる。断定するのは早すぎるが、あえていえばリズムを受けとるのはこれまで知られたどの感覚でもなく、まったく未知の新しい中枢だと考えるのはかなさそうである。もっとも現代の脳科学や生理学によっても、リズムの中枢と呼ぶべき脳の部位や反射中枢は見つかっていないから、とりあえずここでは未知の新しい中枢と名づけておくしかないだろう。もっと正確を期すなら中枢があるという推定も棚あげして、身体をあらたに定義しなおしたうえで、^③リズムを感受するのは身体の全体だと考えておくべきかもしれない。

たとえばギターやピアノなど楽器を弾く人が、からだのどこでリズムを感じているかを想像してみるがよい。当然、演奏者は指でリズムを奏でるわけだが、それが良いリズムを生んでいるかどうかを判断するのは、その人の指ではなく耳だろう。いったいリズムは指にあるのか耳にあるのか、その両方にあるのだろうか。もちろん両方にあると言うのがいちばん簡単そうだが、少し考えてみれば両方は両方といえないほど **X** して別のものになっている。そのうえ指は腕や肩はもとより腰や足にいたる **Y** に支えられているし、耳もまた「脳天に響く」とか「腹に響く」という比喩が示すように、**Y** で音を聞いている。どう考えても、**Y** のなかでリズムが存在する場所を局限するのは難しそうである。

いわゆる視覚的なリズム、空間的なリズムというものに目を転じると、このことは一層よく理解できる。点と線のつながり、**E** **シキ** サイを帯びた面の配置は視覚を通じて受容されるが、物理的には動かないそれらの形態がそのままリズムを生むはずはない。思いだすべきは、日本庭園の飛び石がリズムミカルに見えるのは、人がそのうえを跳んで歩くからだという事実である。かたちが流れや弾みを感じさせるのは、^④第一には見る人がそのかたちをなぞって眼球を動かし、第二にはそれを描いた画家の運動を自分の体内で追体験するからだだろう。かたちを見てリズムを感じる人はみずからもひそかに身体を動かし、その運動感覚のリズムを味わっていると見るほかはない。

俗にいう視覚的リズムは、じつは視覚と運動感覚のまさに中間にあるといえそうだが、このことは造形のなかでもとくに書道、文字を美しく書く芸術においてはずきりと見てとれる。この場合にはリズムの感受能力には感覚だけでなく知識も加わり、筆法や筆順、文字の並びの方向を知っていることが鑑賞の前提になる。漢字やかな文字がとくに典型的だが、ローマ字やアラビア文字においても、文字のリズムを味わうには見る人が心のなかで書いてみる^⑤ことが必須である。ここまでくると、^⑤リズム感受の中枢はたんに諸感覚の中間にあるというのみならず、知識をも含めた人間の総合能力のなかにあるという事実が、予想され始めるのである。

(山崎正和『リズムの哲学ノート』より)

(一) 〓 線部 A 「ミヤクドウ」、B 「サイコウ」、C 「ユライ」、D 「ボットウ」、E 「シキサイ」を漢字に改めなさい。

(二) 〓 線部 a 「ば」、b 「この」、c 「ない」、d 「裏返し」、e 「もちろん」の品詞名を漢字で答えなさい。

(三) 〓 線部① 「そのことを指摘されればただちに意味を理解する」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア リズムの意味を知らない人がいたとしても、その人がリズムカルに歩くことさえできれば、それは意味を知っているのと同じことである。

イ リズムという語を知らなくても、その人自身が歩いている時に感じているのがそれであると気づきさえすれば、どのようなものかはおのずとわかる。

ウ リズムという言葉を知らなくても、人は舞踊や音楽を鑑賞するときに見覚や聴覚を通してその中にあるリズムを感じ取ることができる。

エ リズムを知らないという人がいたとしても、歩くときは自然にリズムをとっているのだから、リズムを知らないというのは錯覚にすぎない。

(四) 〓 線部② 「リズムは人の生涯を貫く共通語である」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人はみずからリズムを刻み、そのリズムを感じることによって感情が変化するという循環の中で生きているのであり、それは生涯つづくものである。

イ 人にはリズムを生み出す本能があり、だれもが例外なく自分に固有のリズムを持っているが、そのリズムの意味や効果は他のどの人であっても理解することができる。

ウ 人には生得的にリズムを感じ取る能力があるので、どんな年齢の人であってもさまざまなリズムの意味を同じように感受することができる。

エ 人はだれでも生まれつき、リズムの意味を理解する能力を持っていて、年代に応じてリズムを効果的に用いることによって、他人とのコミュニケーションを図る。

(五) 〓 線部③ 「リズムを感受するのは身体の全体だと考えておくべきかもしれない」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の身体のどこにリズムを受けとる場所があるのかということの答えは、脳科学や生理学の今後の進歩に期待しておいた方がよ

い。

イ 人の身体やリズムというものについては未知のことが多いので、それらのことが完全に解明されるまでは拙速な判断を下さない方がよい。

ウ 人の身体のどこかでリズムを感じているという考えは明らかに誤っているので、身体とリズムとの関係を定義し直した方がよい。
エ 人の身体にリズムを受容する部位があると考えるのを保留して、身体そのものがリズムを感じることができると考えるよりほかはない。

(六) X に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 融合 イ 分散 ウ 調和 エ 混在

(七) Y に入れるのに最も適当な語を本文中から抜き出しなさい。なお、 Y は本文中に三か所あります。

(八) — 線部④「かたちを見てリズムを感じる人」の内面で起きている作用と同様の具体例として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 湖面に浮かんでいる水鳥の大きさの違いからその風景にリズムを感じている。

イ 高層ビルの建築作業を見ている人が自分の鼓動のリズムが速くなるのを感じている。

ウ 雨宿りをしている人が雨のしずくが垂れるリズムから降る雨の量を感じている。

エ 神社を参拝しに来た人が石段を上りながら先を見上げてリズムを感じている。

(九) — 線部⑤「リズム感受の中枢」とあるが、書を鑑賞するときに必要な「リズム感受の中枢」とはどのようなものですか。本文中の言葉を用いて五十字以内で具体的に説明しなさい。ただし、「」で括弧したもの。で終わること。また、句読点や記号も字数に含めず。

〔問題二〕次の【Ⅰ】【Ⅱ】は、一続きの文章です。これらを読んで後の問いに答えなさい。

【Ⅰ】

「テストを返却しまーす。名前を呼ばれた人から取りに来て」

生物担当の女教師が黒板の前で手を振っている。机に突っ伏していた面を上げ、私は凝り固まっていた唇をもごもごと動かした。自称進学校である我が校では、三年生になると定期テストの大半が模試の過去問となる。入試対策に力を入れているせいだ。学級文庫の多くは有名大学の*赤本で占拠されているし、校外で行われる模試はほとんど強制的に参加させられる。

「辻脇さん……辻脇菜奈さん！」

「はい」

名を呼ばれ、私はわざと緩慢に席を立った。周囲の生徒たちは返却された解答用紙を互いに見せ合っている。だが、その結果を深刻に受け止めている者はいない。一般入試の場合、内申点は合否に関係ないことがほとんどだ。A、通知表の成績がいくらか悪くならうとも問題ない。

「辻脇さん、また勉強しなかったでしょう」

はい、と先生が手渡してきた解答用紙には、赤インクでハッキリと数字が刻まれていた。七点……もちろん、百点満点のテストの話だ。

「だって、入試で生物いらんし」

「そうは言っても*赤点はまずいわよ。補習決定ね」

「あーハイハイ。いつものやつね」

「先生としてはいつもつてことが嘆かわしいんだけどね。せめて赤点は回避できるよう、もう少し頑張つて」

「了解です」

小言を聞き流しながら、私は逃げるように席へ戻る。生物が嫌いというわけではない。ただ、私の受験には一切必要のない科目なだけで。

「受験まで一年を切ったんだから、貴重な時間が勿体ないよね」

唇を尖らせた私に、隣に座る宮本知咲が呆れたように肩を竦めた。

「そうは言っても、赤点続きはまずいんじゃない？ 一学期の評定、一になっちゃうよ？ 最終評定が一だったら留年らしいじゃん」

「大丈夫大丈夫。補習さえできれば留年は回避できるから」

「菜奈が平気ならいいんだけどね？」

少し困ったように笑う彼女とは、中学時代からの付き合いだった。帰宅部で暇な時間を持て余している私とは対照的に、知咲は

三年生になっても放送部で活動している。真面目でいい子、型にはまった優等生。それが、私が抱く知咲の印象だった。

「——長谷部君」

先生の解答用紙の返却は未だに続いていた。はい、と立ち上がった男子学生は、我が校の誇り①と名高い長谷部光だった。一年生の時から模試では一位、有名大学の志望校判定は、軒並みA判定。まるで漫画のキャラクターみたいな、模範的な成績優良児だ。少し潰れた鼻の上にある、強すぎる乱視を矯正するための分厚い眼鏡。真っ白なカッターシャツに包まれたその背中、緩やかに丸みを帯びていた。

「どうしたの、今回は」

そう問いかける先生の表情からは、彼を心配する感情がBと伝わってきた。長谷部君がこんな風に言葉を掛けられるなんて珍しい。周囲の生徒たちもざわついている。C、ケアレスマスでもして減点を食らったのだろうか。

解答用紙を受け取りながら、長谷部君はどこか照れたように頬を掻いた。

「いえ、特には」

「長谷部君自身が何も無いって言うなら、先生も何も言わないけど。ただ、三年生だつていうのに気を緩め過ぎじゃない？今回の結果は、親御さんにも伝えるからね」

「分かってます、もちろん」

「次のテストからはちゃんとやるのよ」

先生の掌が、長谷部君の丸まった背を叩いた。背筋を伸ばし、長谷部君は丁寧に用紙を折りたたむ。その肩を、近くにいた男子生徒の右手が、掬えた。親しげな仕草で腕を回し、彼は長谷部君に声をかける。

「何があつたんだよ」

その問い掛けは、Dを立てているクラスメイト全員の心を代弁していた。長谷部君が穏やかに微笑する。頬肉が動き、その柔らかな涙袋が押し上げられた。なんでもないよ、と彼は普段と何ら変わらぬ声で言う。

「ただ、赤点を取っただけ」

* 「赤本」 —— 大学入試の過去問題集。

* 「赤点」 —— テストで一定の点数以下になること。

(一) —— 線部 a 「軒並(み)」、b 「緩(やか)」、c 「掬(えた)」の読みをひらがなで答えなさい。

(二) [A]、[B]、[C] に入れるのに最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|------|---|------|---|-------|---|------|
| A | — | ア | むしろ | イ | つまり | ウ | なぜなら | エ | または |
| B | — | ア | しみじみ | イ | こまごま | ウ | こそこそ | エ | ひしひし |
| C | — | ア | かえって | イ | まして | ウ | もしかして | エ | どうして |

(三) — 線部①「と」と同じ意味・用法で使われているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ皆が反対しようと思見を変えなかつた。
 イ 彼の父親と私の父親は幼い頃からの知り合いだ。
 ウ そのまま放っておくと自然に固まってしまいます。
 エ 新人でありながらチームの救世主と仰がれている。

(四) D に入れるのに適当な語をひらがな四字で答えなさい。

【II】

放課後のグラウンドは、いつだつて活気に溢れている。サッカー部、野球部、ハンドボール部。多くの部活が混在する空間で、今日の主役は陸上部だった。楕円形に描かれたトラックの中で、二本脚のバネがびんぴんぴんと跳ねている。ハーフパンツから覗く彼らの脚はすっかり日に焼けていた。

「……………」

気まずい、と本音が口に出そうになったところを慌てて呑み込む。室内に充滿した沈黙が、私の背中にのしかかる。窓際と廊下側、教室の一番端と端に、まるで離れ小島のように私と長谷部君は座っていた。赤点の補習のためだ。普段ならば教室でダラダラと駄弁っている生徒たちも、この② 異質な空気を察してか早々に帰宅してしまつた。

ガリガリガリ。シャープペンシルの先端が、プリント越しに机を引つ掻く。補習対象者に課せられたプリントの山は、とてもじゃないが一日で終わる量ではない。長谷部君ほどの頭の良さならすぐにも片付けられるのかもしれないが、と私は顔だけを彼の方へと向ける。視線に気付いたのか、イツシンフランにペンを走らせていた長谷部君の手が止まつた。俯いていた横顔がゆっくりと上がる。

視線がかち合う。

透明なレンズ越しに見えるせい、長谷部君の目はどこか遠くにあるように思える。水族館の水槽のガラス壁みたいだ。
 「……………」

不思議そうに、長谷部君が小首を傾げた。クラスメイトではあるが、彼と一対一で話すのはこれが初めてだった。
 「あ、いや、赤点の補習が一人じゃないの、初めてだから。緊張して」

「あー、僕のせい？」

「せい、とか。そういうつもりで言ったわけじゃないけど」

「なんだか会話がぎこちない。探り探りの言葉の、オウシユウは、親しい友人を相手にしたときの数倍疲れる。それでも純度百パーセントの沈黙よりは、余所余所しい会話の方がよっぽどマシだ。」

「プリント、まだ掛かりそう？」

私の問いに、彼は積まれたプリントの端を捲り上げた。

「全然掛かる。補習課題って、結構量あるんだね」

「長谷部君は補習受けたの初めてなんじゃない？」

「うん、これが初めて」

「なんで赤点だったの？ 正直、長谷部君だったら学校のテストぐらい余裕で満点取れるでしょ」

「そんなことないよ。満点なんて、なかなか取れるもんじゃないし」

「信じらんない」

「本当だよ。全部間違えないって難しいから」

ふふ、と彼の唇から吐息が零れる。張りつめていた空気が和らいだのを肌で感じた。遠慮がちに伏せられた細い睫毛の頼りなさ
が、私の心臓をくすぐった。

「辻脇さんはよく赤点取ってるよね」

面と向かつて言われると、③少し自分がみつともない。込み上げる羞恥心を隠すように、私はプリントで顔の下半分を覆った。

「一応言っておくけど、生物限定だからね」

「生物、嫌いな？」

「嫌いつていうか、私にとっては時間の無駄だから。受けようと思ってる学校、そもそも生物も化学もいらなしいね。要るのは三教科だけだし」

「私立？」

「そういこと」

爪先を上げ、私は大きく足を揺らす。長谷部君はきつと、国立大学に進学するのだろう。それも一流の。

長谷部君の手には、木製のシャープペンシルが握られている。普通の文房具屋で買ったにしては、ちよつとだけ高そうなやつ。パリツと糊のきいたカッターシャツだつてくるぶしを覆う靴下だつて、長谷部君の所持品はその全てが丁寧だと感じる。あからさまに高価だと分かるブランドものではなく、生活の質の高さを遠回しに感じさせるような、ちよつといい物。まるで長谷部君そのものみたい

だ、と思う。

「ずっと思ってたんだけど、長谷部君ってなんでこの学校に来たの？」

「なんでって、なんで？」

「だつてさ、もつといい高校にもいけたでしょ」

平均よりは良いけれど、最高というにはほど遠い。他人よりは優れているという自負を持ちつつも、名も知らぬ誰かに対して劣等感を覚えている。この学校にいる生徒たちは、そういう人間ばかりだ。凡庸と優秀の境目を漂って、自分の立ち位置をつかみ損ねている。

「辻脇さんはなんでウチに来たの？」

長谷部君の瞳が、じつとこちらを見つめていた。窓から差し込む光が私の体に遮られ、大きな影となつて彼の体を呑み込んでいく。

「私は、普通に第一志望だったから。私の通つてた中学だと、そこそこ頭いい子はみんなウチを受けてたんだよね」

「僕の中学もそうだったよ」

「でも、長谷部君はそこそこってレベルじゃないじゃん」

はは、と彼は笑った。誤魔化すような、^④社交辞令的な笑い方だった。私は指で前髪をすくうと、そつと耳の後ろに押しやった。一対一で話すのが初めてだと言つても、彼についての情報が全くないというわけではない。なんせ同じクラスなのだ。日頃の態度と噂から、その内面は推し量れる。

長谷部君は温厚な人だった。声を荒らげることもないし、ムキになることもない。友人たちに勉強を教えることもあるが、頭の良さを鼻に掛けない。人望アリ、積極性ナシ。委員会にも部活にも入らず、帰宅部の日々を謳歌している。どうやら入学時から部活に入るつもりはなかったらしく、一年生時にクイズ研究会の熱心な勧誘を断り続けたという噂は有名だった。長谷部君は良い人だ。多分、彼を知る人ならみんなそう言う。でも、その根底にあるのが純粋な優しさかどうかは、私にはよく分からない。

「ウチの学校って、県内の上位十校には入ると思うけど、でも、絶対に一位じゃない。長谷部君だったら一位の学校でも通用する学力だと思うんだけど、なんでウチに来たのかなつて」

「受けてないから受かるかは分からないけどね。ただ、受かる力がある」とと実際に通うことは別物かなつて」

「それはまあ、確かに」

これは私の勝手な予想だけれど、長谷部君は自分よりも E 人間の中でないと活躍できないタイプだ。自分でもそれが分かっているからこの学校にやって来た。そういうタイプの人間は特に珍しくない。上位集団の中に混じつて自分が賢いというアイデンティティを見失うくらいなら、少しレベルを下げてトップの座を保持した方が三年間を有意義に使えるというものだ。自身の能力を最

大に發揮できる場所を把握している人間は強い。⑤ 大抵の人は、無理して背伸びをしがちだから。

「頭いい人つて、すごいなつて思うけどね」

「別に、僕は頭がいいつてわけじゃないから」

「そこまでいくと謙遜つていうより嫌味だね」

何気なく放つた言葉に、一瞬だけ長谷部君の顔が強張った。首筋から出つ張る喉仏がぎくりと震える。

「あ、ごめん。本気で言つたわけじゃないよ」

慌てて謝罪すると、長谷部君は静かに首を左右に振つた。

「こちらこそ、なんかごめん。上手く返せなくて」

「いやあ、謝られるとますますごめんつて気持ちになるんだけど」

「そっか……。なんか、人間と会話するのつて難しいな」

「その言い方だと普段は* 人外と会話してるみたいだね」

「そういうわけでもないんだけど。こう、人見知りだから。あんまり普段喋らない人としやべると、いつばいいつばいになるといふか」

「わー、奇遇。私も人見知りだよ」

「どこがなの。俺、『わー』とか言う人見知り見たことないよ」

ぼろりと漏れた一人称は、きつと無意識だったのだろう。吐息に混じる笑みの気配に、私の心臓が大きく跳ねた。幾重にも被さつた彼の濃厚な皮を、玉ねぎを剥ぐみたいに一枚一枚剥がしてやりたい。最後まで手を動かせば、そこに残るのは彼の空虚な本性だろうか。

(武田綾乃「赤点と二万」より)

* 「人外」——ゲームや漫画の中に登場するキャラクターで、人間ではない存在のこと。

(五) 〓 線部 d、e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

「イツ d シンフラン」

ア カクシンを持って答えた。 イ 菌の体内へのシンニユウを防ぐ。

ウ シンミツな関係を築く。 エ ホウシン状態で動けない。

「e オウシユウ」

ア 自宅と会社をオウフクする。 イ 来客にタイオウする。

ウ ジュウオウ無限に動く。 エ 氏名の横にオウインする。

(六) ——— 線部② 「異質な空気」とありますが、どのようなところが異質だったのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普段は人あたりの良い長谷部が、まるで話しかけないでほしいとでも言いたげな様子で、「私」には目もくれず、補習課題に取り組んでいたところ。

イ グラウンドで生き生きと部活動に励んでいる生徒たちとは異なり、教室では「私」と長谷部が憂うつそうに補習課題に取り組んでいたところ。

ウ 補習課題は他の人と相談しながら取り組むのが普通なのに、「私」と長谷部は離れて席に座り、お互いに沈黙を守って課題に取り組んでいたところ。

エ この日は、これまで何回も補習で残されている「私」だけでなく、赤点など取るはずのない長谷部がひたすら補習課題に取り組んでいたところ。

(七) ——— 線部③ 「少し自分がみつともない」とありますが、この時の「私」についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤点を取ったのは一科目だけなのに、何教科も取ったと長谷部に勘違いされていることが分かり、みじめに感じている。

イ 生物にはあえて力を入れていなかったのだが、長谷部の言葉を受けて、赤点を取ったことについて恥ずかしく感じている。

ウ 赤点は赤点でも七点というのはあまりにも低く、ありえない点数だと長谷部に指摘されて、きまりが悪いと思っている。

エ いつも赤点を取っていると長谷部から小馬鹿にされたことで自尊心がひどく傷つき、いたたまれない思いになっている。

(八) ——— 線部④ 「社交辞令的な笑い方」とありますが、この時の長谷部の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学力のレベルが高いという意味のことを言われたが、特にそれには何の感慨も覚ええず、笑って受け流した。

イ 学力の高さをほめられることには慣れているので、特に感情を表すことなく、分別のある行動を心がけていた。

ウ ようやく自分の能力の高さを認められてうれしかったが、喜んでいるということに気づかれまいとしていた。
エ 心からほめてくれているようには感じられなかったけれども、にこやかに笑って感謝しているように見せかけた。

(九) E に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 上位の イ 幼稚な ウ 格下の エ 純粋な

(十) —— 線部⑤ 「大抵の人は、無理して背伸びをしがちだから」とありますが、このように考える「私」はどのように行動していますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア できることとできないことを見極めて自分の能力に見合った方法を考えた結果、入試に関係ない科目は勉強せずに、必要なものだけを勉強している。

イ 苦手な科目があまりにも多いので、入試の科目数が多い国立大学を受験するのはあきらめて、科目数が少ない私立大学を目指して勉強している。

ウ 初めはレベルの高い大学を目指していたものの、次第に手の回らない科目が増えてきたので、最小限の科目で受験できる大学に志望校を変更して勉強している。

エ もし自分の実力に見合った高校に入学していたら、部活動でも勉強でも活躍できていたはずなのにと、今の学校に入学したことを後悔しながら生活している。

(十一) ~~~~~ 線部X Y Zについて次のように説明しました。これを読んで後の問いに答えなさい。

~~~~~ 線部X 「長谷部君の目はどこか遠くにあるように思える」という表現が、後に「i」という表現に変わっているように、「私」と長谷部との心理的な距離は徐々に狭まっていく。それと同様に、~~~~~ 線部Y 「私の心臓をくすぐった」という表現が~~~~~ 線部Z 「私の心臓が大きく跳ねた」という表現に変わったことからは、「私」は長谷部もiiに過ぎないと分かり、iiiと思うようになったことが読み取れる。

問 1 i に入れるのに最も適当な一文を【Ⅱ】から探し、最初と最後の三字を抜き出しなさい。ただし、句読点や記号も字数に含めます。以下の問題も同様です。

問 2 ii に入れるのに適当な言葉を十字以内で答えなさい。

問 3 iii に入れるのに適当な言葉を十五字以内で答えなさい。